

ドイツ中世の女性教育と理想的女性像

尾 野 照 治

1. 女性差別の問題が、人間存在の根底にかかわる問題として認識されるようになって、すでに久しい。戦後にわかにか脚光を浴びるようになった女性学の分野でも、この問題が世界中で論議され、その成果としてかなりの数の著書が刊行されている。しかしそれらを見るに、古い時代にまで遡り、人間の文化の基底に視点を定めて、大きなスパンで歴史的に取り組んだ研究は、思いのほか少ない。従ってヨーロッパ中世にまで遡って、とりわけ文化が大きく花開いたドイツの12、13世紀にまで遡って、当時書かれたものを厳密に読み解いて吟味し、女性蔑視と女性賛美がどのように行なわれたのかをつぶさに探求することは、女性差別の問題を考察する上で、大きな重要性をもつものと思われる。

旧約聖書の時代以来、女性を敵視する強固な伝統を誇ってきたヨーロッパで、11世紀になって突然、女性賛美の発言があちこちで、声高に行なわれるようになった。この不思議な反転現象を考察するとき、視野に入れておかなければならない問題は数多い。それまで女性のどの点が蔑視の対象になっていたのか、またどの点が賛美の対象になったのか。そしてこの新しい女性像が打ちたてられたのは、どのような社会背景に基づいているのか。そもそも当時の理想とする女性像とは、どのようなものであったのか。更に、そのような理想像に近づけるために、女子にどのような教育が施されたのか等々。女性差別の問題を古い時代にまで遡って分析するとき、解決しなければならない問題が、余りにも数多く横たわっている。そこで、有力な証言となる3つの引用を下に掲げて、この小論で取りあげる問題の種類と、それらの解決の方向とを、あらかじめ定めておく。

ドイツ中世の最も重要な法書の一つに、ザクセンシュピーゲルがある。その法書の相続に関する条文の中で、女性が相続できるものの一つとして、「詩篇と、礼拝に必要なすべての宗教書、および婦人達が読んでいるすべての書物」が挙げられている。

Si nimt ouch alliz, daz zu der gerade gehort, daz sint alle schaf, unde gense, kasten mit ufirhabenen liden, alle garn, bette, phule, kussene, lilachene, tislachene, twelen, badelachene, beckene, luchtere, lin unde alle wipliche kleider, vingerlin unde armgolt, sappile, seltere unde alle buchere, die zu gotis dienste gehoren, die vrowen phlegen zu lesene, sedelen, laden unde tepte, ummehenge unde ruckelachene unde alle gebende, diz hort zu vrowen gerade.¹⁾

《そして女性が相続すべき財産すべて、すなわちすべての羊および鷺鳥、弓形の上蓋のついた長持、すべての紡ぎ糸、寝台、布団、枕、亜麻製シーツ、テーブルクロス、タオル、バスタオル、洗面器、金属製の燭台、リンネル、およびあらゆる婦人服、指輪、頭飾り、詩篇、ならびに礼拝に必要なすべての宗教書、および婦人達が読んでいるあらゆる書物、椅子および櫃、絨毯、カーテン、タペストリーならびにすべての帽子。これらが、女性の相続できるものであった。》

女性が相続できるものの中に、なぜ詩篇や他のすべての書物まで数え入れられているのか。ここに問題解明のための一つの鍵を求め、当時の女性の教育と教養のレベルがどのようなものであったのか、更に当時の女性蔑視と女性賛美にこれがどうかかわっていたのかを、多少なりとも繙いていく。

13世紀前半に活躍したイタリア系の司教座聖堂参事会員トマズイン・フォン・ツイルクレーレは、ストア哲学とキリスト教倫理学を基にして、騎士の倫理の土台を固め、騎士に道徳的自覚を与えるために、道徳哲学の教科書とも言うべき『異国の客』を著した。その中で彼は、女性の肉体的な美にしか目が向かない男たちを批判しながら、むしろ女性の内的美質である徳操と智恵にこそ、目を向けるべきであると説く。

Ein toerfcher man der fiht ein wîp
was fi gezierd hab an ir lip.
er fiht niht waz fi hab dar inne
an guoter tugende und an finne.
fô merket ein biderb man guot
ir gebærde und ouch ir muot.
hât ein ros fatels niht,
ez iſt dar umbe niht enwiht.
iſt ein guot wîp niht ze rîche,
ir iſt doch harte ungelîche
ein iegelîch rîchez wîp
diu nâch unreht hât ir lîp.
⋮
ern fol ahten niht ze vil
waz fi habe, merke daz
ob fi fi guot: er tuot baz;
wan mit eim armen wibe guot
mac man wol hân vrœlîchen muot,
und mit eim rîchn unguotem wîp

mac man hân unvroelichen lîp²⁾

《愚かな男は、婦人が体をどのように飾っているかを見るが、内部にどんな徳操や分別をもっているかを見ない。それに対して有能で立派な男は、婦人の所作や心の動きにも注意を払う。馬は鞍をもっていないからといって、無価値というわけではない。立派な婦人はあまり裕福でなくても、裕福でいながら不正な生活を送る婦人にまさる。……(立派な婦人を選ぼうとする)男は、婦人が外面をどんなに飾っているのかということに、あまり注意を向けるべきではない。むしろ婦人が内面的に立派であるかどうかには、留意する方がよい。というのは、貧しくても立派な婦人となら、当然喜ばしい気持ちを抱くことができるが、裕福であってでもくだらない婦人となら、男は悲しい生活を送ることになるからだ。》

キリスト教世界では、旧約聖書の時代以来、女性は男性の付属物であり、劣等で悪しきものであるとする女性蔑視が、その思想の基調となっていた。それにもかかわらず、キリスト教に深く帰依するトマズインは、女性賛美の言葉をドイツの宮廷騎士達に送った。これは一体どうしてなのか。そして彼の女性礼賛は、何を目的にしていたのか。文芸作品の中での男性と女性の関係の反転現象とも密接に関連しているので、少なくとも問題解決の糸口だけは、見いださなければならない。

12世紀中頃のドイツの叙情詩人デア・フォン・キュレンベルクの詩は、南仏プロヴァンスからドイツへと恋の歌の作詩法がまだ伝播していない時代のものである。この詩人の女性蔑視とも解せる土着の歌は、トロヴァドゥールの恋の歌と比較すると、素朴で骨太であり、荒っぽささえうかが

える。夜空に朗々と美声を響かせて歌う騎士に向かって、自分の恋人になれと命ずる女傑のような婦人。他方、それをすげなくことわって立ち去る傲岸な騎士。このような男女の関係を描く歌は、これ以後のミネゼングには見られない。この詩人は女性を、鷹狩りの鷹と同等に扱い、彼女に挑発的な言葉を投げかける。

'Ich stuont mir nehtint späte an einer zinne,
dô hôrt ich einen rîter vil wol singen
in Kûrenberges wise al ûz der menigîn.
er muoz mir diu lant rûmen, alder ich geniete mich sîn.'

Wîp unde vederspîl diu werdent lîhte zam.
swer sî ze rehte lucket, sô suochent sî den man.
als warb ein schoene ritter umbe eine vrouwen guot.
als ich dar an gedenke, sô stêt wol hôhè mîn muot.³⁾

《私は昨夜遅く、狭間壁のそばに立っていた。すると大勢の中から一人の騎士が、キュレンベルクの節回しで、いかにも朗々と歌うのが聞こえた。あの騎士は私の国を出て行かねばならぬ。さもなければ、私は騎士を自分のものにして楽しもう。》

《女と鷹は、いとも簡単に手なずけられる。正しく誘えば、彼女らの方から男を求めてくる。このようにして素晴らしき騎士は、立派なご婦人に求愛した。そのことを思うと、私の心は激しく高揚する。》

フランスから雅やかな宮廷文化が伝わってくる前のドイツ叙情詩は、プ

ロヴァンス風の恋愛詩を模倣するようになってからのそれと、大きく異なっている。それまで女性を敵視していた男どもが、突然貴婦人の足もとに跪き、恋の歌を捧げながら婦人奉仕を誓うようになる。キュレンベルクの歌に見られる、これまでの対立的な男と女の関係は、ここに至って逆転する。このような現象を、一体どのように理由付けすべきか。中世の理想的女性像の焦点をしぼるときに、必ず触れなければならない問題である。

以上3つの引用から、問題となるいくつかの事柄を明示し、女性差別の観点から、それらを解明するおおよその枠組みを、ここに提示した⁴⁾。

2. 女性を軽蔑し敵視する伝統は、なによりもキリスト教が培ってきた。現世を否定し来世を絶対視するキリスト教は、肉体と官能に対しても、当然ながら否定的でなければならなかった。キリスト教が崇拜の対象とする女性は、聖母マリアに代表される。従って、キリスト教世界の男性が肯定する女性は、マリア的性質、すなわち純潔、貞淑という語が冠せられる女性である。肉体的な力にまさるが、肉の欲求に負け易い男性は、同じ欲求を女性をもつことに同意できなかつた。男性の感情の中には、絶えず女性に対する恐れが横たわっていたからである。聖書の中には、女性を敵視する罪深い伝統を育んできた文言が、あちこちにちりばめられている。旧約聖書の中の『創世記』で語られる墮罪も、イブのもつ性質、つまり女性一般のもつ性質によって惹き起こされたものであると、伝統的に見なされている。神の忠告に耳を貸そうとしない傲慢と不服従、更に悪魔である蛇の誘惑にそそのかされ易い不誠実さがそれである。旧約聖書外典の『シラ書』(25, 26-33)は、すべての悪も女性の悪に比べれば無に等しいと女性を貶め、神に対する罪の根源は女性にあると決定的な差別をしながら、聖職者達や多くの一般信者達を洗脳していった。同じく旧約聖書の『箴言』(30, 15-16)は、「飽くことを知らぬものは三つ。十分だと言わぬものは四つ。

陰府、不妊の胎、水に飽いたことのない土地、決して十分だと言わない火」と教える。ここでは女性を、無限の欲情に従う子宮ととらえ、地獄と并列に扱っている。このような理性の欠陥は、驚くべき女性敵視から生まれたものである。同様に旧約聖書の『コヘレトの言葉』(7, 26-28)は、女性蔑視を次のように表現する。「わたしの見い出したところでは、死よりも、畏よりも、苦い女がある。その心は網、その手は枷。神に善人と認められた人は彼女を免れるが、一步誤れば、そのとりことなる。……千人に一人として、良い女は見いださなかった。」

旧約聖書のみならず、新約聖書においても、女性差別の思想を表わす文句は少なくない。旧約の『創世記』(2, 18)には、女性は単に男性に従って補助するためにのみ創造された、と書き記されている。この教えは、新約聖書の『エフェソの信徒への手紙』(5, 22-24)では、次のように説かれる。「妻たちよ、主に仕えるように、自分の夫に仕えなさい。キリストが教会の頭であり、自らその体の救い主であるように、夫は妻の頭だからです。また、教会がキリストに仕えるように、妻もすべての面で夫に仕えるべきです。」女性は必ず男性に従うようにと、繰り返し主張がなされている。同じく新約聖書の『コリントの信徒への手紙』(14, 34-35)でも、女性は男性に従うようにと教える。「婦人たちは、教会では黙っていなさい。婦人たちには語る事が許されていません。律法も言っているように、婦人たちは従う者でありなさい。何か知りたいことがあったら、家で自分の夫に聞きなさい。」更に新約聖書の『テモテへの手紙』(2, 11-14)では、イブの犯した罪を、彼女の末裔である全女性が負って、男性の下で従順にしているべきことが説かれる。「婦人は、静かに、全く従順に学ぶべきです。婦人が教えたり、男の上に立ったりするのを、わたしは許しません。むしろ、静かにしているべきです。なぜならば、アダムが最初に造られ、それからエバが造られたからです。しかも、アダムはだまされませんでした、

女はだまされて、罪を犯してしまいました。」

中世のヨーロッパ世界を精神の面で支配したキリスト教が、新・旧の両聖書によって、このような女性蔑視の教えを広めたために、女性は宗教界のほとんどの地位にも就けず、あらゆる公職から追放されてきた。その後現代に至るまで、キリスト教は女性敵視の教理を男たちに与えてきたことによって、男女間の不平等に償いきれないほどの大きな責任を負っている。

3. 教理の中へ強固に組み込まれた女性敵視の思想は、中世の宮廷文学においても踏襲されていった。叙情詩のジャンルでは、前に挙げたデア・フォン・キュレンベルクやフリードリヒ・フォン・ハウゼンらの、初期のミンネゼンガー達の歌がそうである。この詩人達の叙情詩は、まだプロヴァンスから全く影響を受けていないか、あるいはほとんど影響を受けていないと見なされている。更に、盛期のミンネゼンガーであるヴァルター・フォン・デル・フォーゲルヴァイデの詩でさえも、女性蔑視の要素を含んでいると思われるものがある。しかし、ラインマル・デア・アルテらが、フランス風の恋愛奉仕の太い基本線を引いたドイツミンネザングにおいては、女性敵視の歌は数少ない例外と言ってよい。

ドイツミンネザングの最古の歌人キュレンベルクは、さながら旧約聖書の女性蔑視の延長線上に作詩しているかのようである。先に挙げた歌で示されたように、激しく燃えさかる情欲に突き動かされて、男を恋人にしようとする女性の衝動を、詩人は赤裸々に描き出す。本来のドイツミンネザングの基調に従えば、恋する男は貴婦人から愛の聴許が得られないまま、いつまでも誠心誠意の奉仕を続けるが、初期のミンネザングでは、ハウゼンの歌に見られるように、男が婦人に背を向けて、奉仕を途中で断念する

こともある。恋の奉仕に報いてくれない貴婦人を非難するばかりか、ヴァルター之歌では、騎士が女性に暴力をふるうことさえある。しかし、このような女性敵視は、伝統的な宮廷文学の範囲を逸脱したものである。

Niemen darf mir wenden daz zunstæte,
ob ich die hazze, die ich dâ minnet ê.
swie vil ich si geflêhte oder gebæte,
sô tuot si rehte als ob siz niht verstê.
mich dunket rehte wie ir wort geliche gê
rehte als ez der sumer von triere tæte.
ich wær ein gouch, ob ich ir tumpheit hæte
für guot. ez engeschiht mir niemer mē.⁵⁾

《かつて私が愛した婦人を憎んでも、それを不実なことだと誰も曲解してはいけない。私が婦人にどんなに懇願しても、彼女はまるで、そのことがわからないかのように振る舞う。彼女の言葉は、まるでトリアの夏と同様に、さっとすり抜けていくように思える。彼女の愚かな振る舞いを、立派なものだと思いちがいをするならば、私こそ馬鹿と言えるであろう。もう二度と、このような過ちは犯すまい。》

詩人が恋につくか聖戦につくかの迷いからやっと脱して、最後の決断をする歌である。これまで一途に貴婦人を愛してきたが、どれほど彼女に愛の聴許を願い出ても、いっこうに聴いてもらえぬ。それゆえ詩人が今になって彼女を憎んでも、恋人に対して不誠実な態度だと誤解してはならぬ。彼女が彼にこれほどつれなくして片意地をはる愚かさを、もし詩人が立派な振る舞いだと誤解するようなことがあれば、それこそ大馬鹿者というこ

とになろう。これまで詩人はつれなくされればされるほど、婦人がいっそう高貴に見えた。そのため彼は、ますます恋心を強めるのであった。しかし今になってやっと、神をないがしろにして恋にうつつを抜かす間違いを悟った。立派な騎士にあるまじきそのような過ちを、もう二度と犯してはならぬ。ハウゼンがここで拒絶するのは、貴婦人個人を越えてミンネそのものである。

ラインマル・デア・アルテによって、報いられぬ婦人奉仕という基本ルールが、ドイツミンネザングの中心に敷かれた。そこでは、そのような婦人奉仕について、いくつもの表現のヴァリエーションはあるものの、ほとんどの叙情詩人は、終始ステレオタイプの婦人賛美を行なう。このような状況の中で上掲の歌は、稀少価値を有するものである。12、13世紀のドイツミンネザングの流れを注意深く観察すると、初期にうたわれた数少ない女性蔑視の歌が、盛期にはすっかり女性賛美の歌に変質する。更に晩期になると、ナイトハルトやタンホイザーらによって、女性に対する否定的なトーンの歌が、再び呼びもどされる。歴史的現象には、しばしば振り子の運動のように、大小の揺りもどしが見られる。文芸現象も例外ではない。

叙情詩とは異なって叙事詩のジャンルでは、女性蔑視の発言が稀少価値をもてないほどに、あちこちで聞かれる。因みに中世ドイツ文学の中で最も秀でた作品とされる、『バルツイヴァル』や『トリスタンとイゾルデ』の中にさえ、伝統的な女性敵視の思想が見え隠れする。旧約聖書以来の、消しがたい女性恐怖の亡霊が、どこまでも消えずについてまわっているように見える。

Ez machet trûric mir den lip,

daz alsô mangiu heizet wîp.
ir stimme sint gelîche hel:
genuoge sint gein valsche snel,
etslîche valsches laere:
sus teilent sich diu maere.
daz die gelîche sint genamt,
des hât mîn herze sich geschamt.⁶⁾

《これほど多くの者が、女という同一の名で呼ばれているのは、私を悲しくさせる。女性らの声は、皆一様に高いのではあるが、不実に身をまかせようとする女性は数多い。そうでない女はわずかである。このように二つに分かれているのに、両者ともに女という同じ名で呼ばれることを、私の心は恥ずかしく思う。》

Der ouch verbieten möhte lân,
ich waene, ez waere wol getân.
daz birt an wîben manegen spot.
man tuot der manegez durch verbot,
daz man ez gâr verbaere,
ob ez unverbotten waere.
der selbe distel unde der dorn
weiz got der ist in an geborn.
die vrouwen, die der arte sint,
die sint ir muoter Êven kint.
⋮
hî, der verbieten kûnde,

waz er der Êven vûnde
noch hiutes tages, die durch verbot
sich selben liezen unde got!
und sît in daz von arte kumet
und ez diu natiure an in vrumet,
diu sich es danne enthaben kan,
dâ lît vil lobes und êren an.
wan swelh wîp tugendet wider ir art,
diu gerne wider ir art bewart
ir lop, ir êre unde ir lîp,
diu ist niwan mit namen ein wîp
und ist ein man mit muote.⁷⁾

《禁止をしないで済むものなら、その方がまことによいことと思われる。禁止は婦人達に多くの不名誉を生み出す。禁止されていない場合には全然しないで済むのに、禁止されたばかりにあれこれしてしまうことがある。このような天の邪鬼は、まことに彼女らに生まれついでのものである。このような性質をもつ婦人達は、彼女らの祖先エヴァの末裔である。……ああ、もし人が禁止をすることができるなら、その禁止のために自分自身も神も見捨てるエヴァたちが、今日でもなんとたくさん見いだされることであろう。これは彼女らの性に起因し、天性の然らしめるところなので、禁止されていることをせずにいられる女性には、多くの称賛と名誉が与えられる。というのは、自分の性に反して徳操が高く、自分の性に抗してまでわが称賛と名誉と肉体を守る婦人は、その名こそ女であるものの、心ばえの点では一人前の男であるからだ。》

ヴォルフラムは、ほとんどの女性が不誠実であるといって嘆き、ゴットフリートは、女性に対してあれこれ禁止をすれば、かえって大きな災いを招くといって落胆する。女性というものは、禁止されればされるほど、逆にそれに反抗しようという気持ちが高まる性質をもっている。そのような性質は、神の禁止を破って知恵の木の実を食べた、旧約聖書の中のイブの性質を受け継いでいる。ミネザングと同様に、宮廷叙事詩の中でも、基本的には女性賛美が行なわれるのであるが、上述のように女性が貶められ軽蔑されることも、決して珍しいことではない。そればかりか、宮廷の中で女性が騎士に殴られて、肉体的に苦しむ場面が描かれることさえある。当時の宮廷で中心的となっていた婦人奉仕や婦人礼賛とは、決して相入ることのない奇妙なコントラストを見せている。

Dô nam Keye scheneschlant
 vroun Cunnewâren de Lâlant
 mit ir reiden hâre:
 ir lange zöpfe clâre
 die want er umbe sîne hant,
 er spancte si âne türbant.
 ir rücke wart kein eit gestabt:
 doch wart ein stap sô dran gehabt,
 unz daz sîn siusen gar verswanc,
 durch die wât unt durch ir vel ez dranc.⁸⁾

《すると内膳正ケイエは、ラーラントの夫人クネヴェアーレの巻き毛をつかんだ。その長く美しい編み毛を、彼は自分の手に巻きつけ、鉄製の蝶番を使わずに、その髪を無理に束ねた。このとき彼は、棒で打

ちつけて彼女の背中に宣誓したわけではなかったが、棒は彼女の背中にとても強く振りおろされたので、彼女の衣服と皮膚を貫いてめりこんできた。そしてついにその棒は、空を切るときのうなり音を発しなくなった。》

最高の榮譽を獲得できるほどの勇士を見るまでは、決して笑わないという誓いを立てていたクネヴァーレは、少年パルツイヴァルが目の前を通りかかったとき、思わず笑顔を見せてしまった。それを見た身分の高いケイエは、誓いを破った彼女を懲らしめようと、髪をつかんだり背中を棒で打ったりして、身分にふさわしくない乱暴をはたらいた。名君の誉れ高く、徳操に満ちたアーサー王の宮廷の中でのことである。世評芳しき円卓騎士達は、このとき不思議なことに、誰もこの虐待を訴えようとしなない。弱き女性を助けるのが、騎士道であるのに、重大なセクシャル・ハラスメントが、あたかも宮廷内で容認されていたかのようなシーンである。旧来の女性蔑視は、このようなところにも生きながらえている。

高貴な男性から女性が受ける虐待は、宮廷叙事詩ばかりでなく、英雄叙事詩の中でも描かれている。『ニーベルングンの歌』では、夫による新妻への体罰という形をとって現われる。グンテル王の妃ブリュンヒルデと、グンテル王の妹で、かつ古今無双の勇士ジークフリートの妻であるクリームヒルトは、愚かにも公衆の面前で夫自慢を始める。その結果互いに相手を侮辱しあうようになり、激しく憎みあった。それゆえジークフリートは、妻のクリームヒルトを殴りつけ、厳しく罰した。このような体罰が、夫の権利として当時認められていたのかどうかは不明だが、宮廷内でこのような荒っぽい暴行があったという報告には、驚きを禁じえない。後日この体罰を、王家第一の下臣ハゲネに語るときの彼女の言葉には、不思議なこと

に深い反省も、乱暴に対する恨みのアクセントも聞きとれない。

Daz hât mich sit gerouwen), sprach daz edel wip.
ouch hât er sô zerblouwen dar umbe mînen lîp;
daz ich iz ie geredete, daz beswârte ir den muot,
daz hât vil wol errochen der helt küene unde guot.》⁹⁾

《「あれ以来、私はそのことを後悔しているのです。」高貴な婦人は言った。「そのためにあのお方も、私を手ひどく打擲なさいました。私がかつて口にしました言葉が、王妃の心を苦しめたことにつきまして、立派で勇敢な主人から十分に懲罰を受けました。】》

立ち居振る舞いから徳操ある心に至るまで、厳しい倫理が要求される宮廷の中で、このような乱暴狼藉が行なわれるのは、驚くべき事柄である。しかし、旧約聖書以来の女性蔑視の流れから考えれば、決して不思議に思うべきことではない。宮廷叙事詩や英雄叙事詩のほかに、宮廷外を舞台とする数多くの世俗文学の作品においても、しばしば女性は男性から貶められ乱暴される。しかしそれとは逆に、男性が女性から体罰を加えられるケースも、全くないわけではない。次に引用される『悪妻の書』は、その確かな証言の一つである。右膝から骨が見えるほど、亭主の足をひどく殴りつけた女房は、次には亭主の頭に張り手をくわせて、ふた目と見られないほどに口をゆがめ鼻をへし折ってやるわと、わめくように罵声を浴びせる。それに対して亭主の方は、まるでネズミのように体を縮めて黙る以外になかった。

ez wirt fride noch stætiu suon

wazgot nimmer zwischen uns zwein.

waz von *dîu*, ist dir ein bein

von *mînen* slegen worden lam?

dir geschicht an dem andern sam.

ich slahe dir abe den rucke,

⋮

waz rechet ir, *frouwe*, an mir?'

sî sprach ‚hâst du rede in dir?'

mich mûet *dîn* klaffen sêre.

swic! du muost unêre

mit schaden laden in daz hûz.'

dô swaic ich alsam ein mûs

und redete *dô* nie mêre,

wan ich vorhte sêre,

ob ich ein wortel spræche,

daz *sî* den fride bræche.¹⁰⁾

《「わたしら二人の間では、安らぎも心からの仲直りも絶対にありやしないわ。わたしがぶん殴って、あんたの足が不自由になったって、それだからなんだって言うのよ。もう一方の足も同じめにあわせてやるわ。背中もぶってやる……」「……妻よ、なんだってお前は、わたしにこんな仕返しをするんだ？」すると女房は言った。「文句あるの？あんたのそのつべこべが、ひどく頭にくるのよ。黙って。そうでないとあんたは、怪我だけじゃなくて、恥辱まで家に招き入れることになるわよ。」そのとき私は、まるでネズミのようにおとなしくして、もう一言もしゃべらなかつた。というのは、もし私が一言でもしゃべる

と、女房がこの束の間の静穏もぶちこわすのではないかと、ひどく心配だったからだ。》

英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』の中には、身分高き国王が女性から体罰を受ける場面が描かれている。国王グンテルは、新婚初夜の床で、新妻ブリュンヒルデによってねじ伏せられ、体にさわれないように壁に吊される。男性にとって恥辱的なこの事件は、一見すると女性蔑視に対する意趣返しとも解せそうだが、実はその裏で女性蔑視の思想にうまく合致するものであった。当時の人々の女性観が、この叙事詩の中の一場面にはからずも露呈している。槍投げ、石投げ、走り幅跳びの三種競技で、どんなに強豪な勇士にも負けたことのない女豪傑ブリュンヒルデは、「悪魔の花嫁」(450, 4)と呼ばれ、薄気味悪い存在として否定的に描かれているからである。グンテルから助けを求められた妹婿ジークフリートは、男性の誇りを傷つけるような女の存在を決して容認することはできないと、彼女の慢心を打ち砕く決心をする。

《Owê》, dâht' der recke, 《sol ich nu mînen lîp
von einer magt verliesen, sô mugen elliu wîp
her nâch immer mêre tragen gelpfen muot
gegen ir manne, diu ez sus nimmér getuot.》¹¹⁾

《「ああ悲しいことよ」と勇士ジークフリートは思った。「この俺が今、ひとりの乙女によって命を失うようなことにでもなれば、これまでそんな行動をとったことがない妻たちが、今後ずっと自分の夫に対して、思いあがった気持ちを抱くようになるかもしれぬ。》

勇士と肩を並べるほどの、強健豪勇な肉体をもつ女性は、聖母マリアの対極に位置しているがゆえに、武勇を競う相手にはなりえても、恋の対象にはなりえない。旧約以来、女性を男性に従う者として位置づけてきた男性論理は、このような女性の存在を拒絶する。そのためにジークフリートは、ブリュンヒルデから帯と指輪を奪い取って、彼女を去勢してしまう。つまり女傑ブリュンヒルデの男性的振る舞いは、表面的には女性蔑視に対して一矢むくいたように見えながら、その実女性敵視の誘い水になっている。

宮廷で貴婦人が騎士から乱暴を受ける様子を直接に描き出すよりも、むしろ作品に登場する女性自身に、女性としての性がどれほど劣ったものであるかを自ら語らせる方が、男性側の意図をより大きく実現できる。その表現法の効果を最も巧妙に利用する術を心得ていた詩人は、洗練された聡明な言葉の模範を示すハルトマン・フォン・アウエである。女は所詮おしゃべりな動物ではあるが、どれほど愚かしいおしゃべりをして、そこには決して悪意や憎しみはないと女性自身に言わせ、男の寛大さを乞うポーズをとらせている。これまでの他の詩人達の赤裸々で辛辣な女性差別に比べると、ハルトマンの女性批判の刃先は、一見かなり磨耗しているように見える。それでもこれは、極めて巧妙な女性蔑視の表現の一つである。次に引用する場面で、妹の相続財産と領土とを、妹に渡すことを拒絶していた姉姫は、アルトゥース王に対してうっかり口をすべらせ、自分の不正を認める返事をしてしまった。そこで彼女はあわてて、女の本質がおしゃべりであるということを言いわけにしながら、その場をなんとか切り抜けようとする。

'Nein, herre,' sprach sî, 'durch got.

ez stât ûf iuwer gebot

beide guot unde lip.
 jâ gesprichet lihte ein wîp
 des sî niht sprechen solde.
 swer daz rechen wolde
 daz wir wîp gesprechen,
 der müese vil gerechen.
 wir wîp bedurfen alle tage
 daz man uns tumbe rede vertrage;
 wand sî under wilen ist
 herte und doch ân argen list,
 geværlich und doch âne haz:
 wan wirne kunnen leider baz.
 swie ich mit Worten habe gevarn,
 sô sult ir iuwer reht bewarn,
 daz ir mir iht gewalt tuot.¹²⁾

《「違います，王様」と彼女は言った。「神かけて，白状したのではご
 ざいません。私の財産も命もともに，王様のご命令にかかっておりま
 す。まことに女というものは，言ってはならないことも，つい口にし
 てしまうものなのです。わたしたち女どものお喋りを，いちいち咎め
 だてしようとなさるなら，きりのないこととございます。わたしたち
 女どもが愚かなお喋りを致しましても，いつも我慢していただかなく
 てはなりません。と申しますのも，わたしどもがお喋りすることは，
 しばしば辛辣になるのではございますが，しかし悪意あつてのことで
 はなく，厄介なお喋りではございますが，憎しみあつてのことでご
 ざいませんので。わたしたちは，残念ながらそれよりもよいお喋りは

できないのです。ですから王様は、私がどのような話し方を致しましても、私を脅迫なさることのなきように、正しい態度をおとり下されませ。》

宮廷叙事詩には、女性敵視や女性蔑視にあたるほど手厳しい表現ではなくても、女性に対する否定的態度が見え隠れする描写は少なくない。宮廷では、他国の身分高き客人達を招いて、しばしば豪華な祝宴を催した。そこで示される主君の *milte* (気前よさ) は、当時求められていた最も重要な徳目の一つである。祝宴では、美しく華やかに着飾った婦人達が、客人達の傍にはべって奉仕する。しかし、そうするようにとの主君の要求の根底にある心的態度は、まぎれもなく女性蔑視である。美しい女性達を、男性世界を飾るマスコットとして、そして奴隷のごとき奉仕者として、男たちは意のままに操るからだ。ゴットフリートの作品『トリスタンとイゾルデ』においては、異国の身分の高い客が宮廷に滞在するとき、父王はイゾルデをしばしば呼び出して、客人達を楽しませるように命じた。生まれ尊き華やかな美しさ、宮廷の礼儀作法にかなう洗練された優雅な物腰、家庭教師を通じて古今東西の書物から得た広い知識と、詩歌管弦の美技などによって、貴族の娘は男性たちをすっかり魅了する。宮廷でしか得られない、精神の高揚した喜びの体験によって、男性たちは愛の奉仕へと誘い込まれる。かつて女性を敵対視していたむくつけき勇士達が、にわかには貴婦人の足もとにひれ伏し、誠実な愛を誓って婦人奉仕を行なうようになったのは、ここにその理由の一端がある。

nu gevuogete ez sich dicke alsô,
ir vater sô der was vröudehaft
oder else vremediū ritterschaft

dâ ze hove vor dem kûnege was,
daz Îsôt in den palas
vûr ir vater wart besant.
und allez daz ir was bekant
höfslîcher liste und schoener site,
dâ kürzete s'ime die stunde mite
und mit im manegem an der stete.
swaz vröude sî dem vater getete,
daz vröute s'al gelîche:
arme unde rîche
sî haeten an ir beide
eine saelige ougenweide,
der ôren unde des herzen lust.
ûzen und innerhalp der brust
dâ was ir lust gemeine.
diu sûeze Îsôt, diu reine
si sang in, si schreip und si las.
und swaz ir aller vröude was,
daz was ir banekîe.
⋮
wan von ir wart manc herze vol
mit senelîcher trahte.
von ir wart maneger slahte
gedanke und ahte vûr brâht.¹³⁾

《さて父王がご機嫌うるわしいときや、異国の騎士達が客として宮廷

の王の御前にいるとき、イゾルデは宮殿の父王の前に呼び出される
ことが、しばしばあった。そのような折には、彼女は知っている限りの
宮廷風の芸能や、見事な立ち居振る舞いで、父王ならびにそこに居あ
わせた多くの人々を楽しませ、時のたつのを忘れさせた。彼女が父王
に与えた喜びは、同じように他の人々をも喜ばせた。貧しい人にも富
める人にも、彼女は幸せをもたらす目の楽しみを与え、耳と心の喜び
も与えた。彼らの喜びは、胸の内でも外でも同じであった。美しく清
らかなイゾルデは、彼らのために歌い、書き、読んだ。彼ら皆の喜び
となったものは、彼女自身にとっては気晴らし程度のものであった。
……というのは、多くの人々の心は彼女のお陰で、あこがれの思いに
満たされたからだ。彼女によって、種々様々な考えや思いが呼び起こ
された。》

中世当時の現実世界について確言はできないが、文芸上の貴族はより高
い社会的地位を獲得するために、娘の結婚を滅多にない好機として十分に
利用した。その際娘個人の意志は全く顧慮されず、彼女は人間というより
はむしろ物として扱われた。それと全く同様に、宮廷の祝宴においても女
性は物と見なされ、個人としての女性の美しさや内的美質それ自体には、
価値が与えられない。女性はただ単に宮廷的観念的な喜びによって、男性
をおびき寄せ、婦人崇拜へと誘って、宮廷につなぎとめておくための見世
物にすぎなかった。従ってその役割は、受動的であり自己否定的である。
この時代には農業の生産性が向上し、都市があちこちに誕生して、職人達
が様々なものを造るようになってきたために、下賜すべきものを単に物だ
けに頼っていては、下臣達をつなぎとめておくことができない。このよ
うな現実の世界が反映されて、宮廷の社交的喜びは、他では得られない大き
な価値をもつようになる。確かに女性は騎士達に、精神の高揚を伴う宮廷

的喜びを与えることができる。しかし、身分の高い教養のある客人達を喜ばせるためには、女性自身も高い教養を身につけていなければならない。女性に対する教育が重要視されるゆえんである。但しその場合の教育は、男性社会の見世物を作るための教育であるから、その根本は女性蔑視の考え方に貫かれている。女性差別の思想は、女性の教育の必要性までも支配していると言うことができる。この女性教育の質と程度を検討する前に、女性蔑視とは対極にある女性賛美が、文芸の世界でどのように行われたのかも、十分に把握しておかねばならぬ。

4. 女性は劣等で邪悪なものであるという伝統的イメージに対抗するものとして、宮廷歌人らは外面的な美と内面的な美質を兼ね備えた新しい女性像を作りあげて、皆一様に女性賛美を行なった。女性を仰ぎ見るといふ、このような新しい男女の関係は、一体何をもとに考え出されたのか。マリア崇拜がもとになって、そこから築きあげられたとも、封建制度の主従関係を男女の関係に置き換えることによって、作り出されたとも言われる。あるいは当時すでにアラビアの宮廷にあったと推定される女性崇拜が、スペイン経由で伝わったものとも言われる。しかし動機は、必ずしも単一とは限らない。いずれにせよこの新しい宮廷的な女性像は、詩人達の偉大な発明品である。そこでは一般に、女性の肉体的な美は、内的美質すなわち徳操の反映である。しかしその場合、外面の美的価値よりも、内面の徳操的価値の方が高い評価を受ける。そのための証言を求めて、トマズイン・フォン・ツイルクレーレ、ハインリヒ・フォン・ルゲ、ラインマル・フォン・ツヴェーターを、証人としてここに出廷させる。

Gar iſt niht ſchœn diu in ir muot
hât deheiner ſlahte guot.

wan fwie fchœne ein wîp fî,
ift untriwe und unzuht derbî
fo ift ir ûzer fchœn enwiht,
fî ift fchœne innerthalben niht.
ich næme ein guot niht fchœne wîp
vür einn fchœnen unvertigen lîp,
wan fî hât ir fchœne in ir gemüete:
fchœne ift ein niht wider güete.¹⁴⁾

《自分の心の中にどんな美質ももっていない女性は、全く美しくない。というのは、婦人がどんなに美しかろうと、不実と不作法がそれに伴っていれば、彼女の外面の美しさは無価値であり、彼女は内面的に美しいとは言えない。私は、美しいが不実な肉体よりも、美しくないが心の立派な婦人の方を良しとする。というのは、彼女は心の中に、美しさをもっているからだ。美しさはただそれだけでは、善き心に太刀打ちできない。》

文芸で女性美を称賛する場合、修辞学の規則に従って行なわれるのが普通である。しかしその場合、特定の女性の個人的な美を称賛するのではなくて、女性一般の理想美を称賛するのである。すなわちそれは、詩人達が観念的に作り出した架空の美である。外面的な美は、一般に内面的美質を写し出すものではあるが、その両者が一致しない場合には、内面的美徳の方が勿論ずっと重要である。そのことは、次のルゲも証言している。

Nâch vrowen schoene nieman sol
ze vil gevraagd. sint si guot,

er lâzes ime gevallen wol
und wizze, daz er rehte tuot.¹⁵⁾

《御婦人がたの美しさを、あまり強く求めてはならない。御婦人がたが立派であるなら、それで満足すべきだし、そうするのが正しいということを知っていなさい。》

外の美か内の美かという二者択一になれば、当然内の美の方が優越することを強調する歌である。しかし騎士達に、騎士道に従った生活をうながし、精神の高揚による喜びを与えるものは、外面の美しさと内面の完全性を兼ね備えた女性である。女性にこの両方が備わっているときにこそ、騎士の心の中に婦人崇拜のミネの力が生まれる。ラインマル・フォン・ツヴェーターは、バルサムと宝石に譬えて特にそのことを強調する。

Der balsam ist den hêrren guot,
der jûnget in ir leben:
sô tiurent edele steine ir muot:
swer des niht mac geleisten,
unt sol der leben, der mac wol werden alt.

Der armen edelen ritter jugent
erbarmet mich: wer git
in heldes muot, wer git in tugent?
wer mûzet si ze vrôuden,
ezn tuo der vrouwen minniclich gewalt?

Der balsam ist ir gelte gar ze hêre;
sô kostent edele steine dannoch mêre.

ir ritter, balsemt iuwer ougen
an guoten wîben, swâ ir müget!
swâ ritters muot ze vrôuden hüget,
den git ir gruoz in herzen balsam tougen.¹⁶⁾

《バルサムは、殿方らには素晴らしいものだ。それは彼らの命を若返らせる。それに対して宝石は、彼らの気持ちを高揚させる。そのようなことの何もない人が生きていくなら、老けて当然だ。

高貴だが貧しい騎士達の青春に、私は同情する。貴婦人らの愛の力が与えてくれなければ、一体誰が彼らに勇敢な心を与えてくれるのか。誰が彼らに徳操を与えるのか。誰が彼らに、宮廷の香ぐわしい喜びを与えるのか。

バルサムは、彼らの持ち金ではとても買えないほど高い。だが宝石は、それよりもずっと値がはる。あなたがた騎士の皆さん、できる所では立派な御婦人を見て、あなたがたの目を楽しませなさい。騎士の気持が喜びのことを思っている所では、立派な御婦人達の挨拶が、騎士らの心にこっそり喜びを送ってくれるのだ。》

5. 前述のザクセンシュピーゲルの引用に、「詩篇と、礼拝用の書物ならびに婦人達が読んでいるすべての書物」を、女性は相続できるという記述があった。この条文は、当時の貴族の女性が受けた教育が、今から想像されるよりも、かなり高いものであることをうかがわせる。宮廷に招かれる賓客に奉仕できるように、すなわち精神の高揚である宮廷的な喜びを、十分に感じさせることができるように、女性達に高い教養が要求された。従って、当時としてはかなりの程度の教育が、彼女らに授けられたと思われる。ラテン語の詩篇が広く出回っていたことから、特に貴族の娘たちは、

基礎的なラテン語の知識を蓄えていたと推定してよい。

mit zuht diu magt zem venster gienc,
mit süezen worten si in enpfienç.
Si truoc ein salter in der hant:
Parzivâl der wîgant
ein cleinez vingerlîn dâ kôs,
daz si durch arbeit nie verlôs,
sine behieltz durch rehter minne rât.¹⁷⁾

《乙女はしとやかに窓辺に歩み寄り、懇ろな言葉をかけながら彼を迎えた。手には詩篇を持っていた。勇士パルツイヴァルは、そのとき彼女の指にはめられている小さい指輪に気がついた。このような苦行の生活の中でも外さずに、真の愛の印として指にはめていたものだ。》

婚約者の亡骸を庵の中に埋葬し、その柩にとりすがって嘆き暮らしていた公妃ジグーネは、この世の喜びをすべて捨てて、詩篇を手にしながらかお祈りする日々を送った。一般に身分が高く教養のある女性は、詩篇を決して手放すことなく、敬虔な暮らしを自分に課した。ヴォルフラムは更に同じ作品の中で、王妃が日常の祈祷書として詩篇を用いていたことを、次のように描いている。

diz was eines morgens vruo:
sîner botschefte greif er zuo.
diu kûnegîn zer kappeln was,
an ir venje si den salter las.

der knappe vür si kniete,
er bôt ir vröuden miete:¹⁸⁾

《小姓が使者としての仕事に取りかかったのは、ある朝早くのことだった。王妃はそのとき禮拜堂にいて、跪いたまま詩篇を読んでいた。小姓は王妃の前に膝をついて、うれしい知らせを彼女にもたらしした。》

当時の女性に対する教育科目は、無論現代のそれのように多様なものではない。貴族の男性や位の高い聖職者は、文法学、修辞学、論理学、算術、幾何学、天文学、音楽という七自由学科を、必要に応じて教育されたが、女性達がこのような学問を修めた形跡はほとんど見られない。高い教養をもっている貴族の女性でも、そのラテン語の知識はそれほど広いものではなかった。裁縫や傷の手当てといった、日常生活のこまごまとした実技的な教育は、年配の賢婦人達が担当し、外国語や音楽、その他の嗜みについては、宮廷直属の高位聖職者か、特別に雇われた博学な家庭教師が担当する。また女子修道院の付属学校も、娘たちを教育する役割を荷っている。しかし、女性に対する教育は男性に対する教育よりも、低いところに設定されていた。旧約聖書以来の伝統に従ってか、女性の知性は男性のそれを、凌駕するものであってはならないとされた。そのために、知性よりも徳操を優先させようとする男の側の方針が、女性教育に徹底される。冷徹な人生智を説くトマズィンは、女性の知性を低く抑制しようとした。女性の知性は、優雅でしとやかに、そして控え目で賢明に振る舞うのに必要なだけあれば、もうそれで十分であると主張する。

Ein vrouwe hât an dem finne genuoc
daz fi fi hüffch unde geuoc,

und habe ouch die gebærde guot
mit ſchœner rede, mit kiuſchem muot.
ob ſi dan hât finnes mære,
ſo hab die zuht und die lêre,
erzeig niht waz ſi finnes hât:
man engert ir niht ze poteftât.
ein man ſol haben künfte vil:
der edelen vrouwen zuht wil
daz ein vrouwe hab niht vil lift,
diu biderbe unde edel ift:
einvalt ftêt den vrouwen wol.¹⁹⁾

《貴婦人は、宮廷的な礼儀作法を心得るための、そしてすばらしい話しぶりや清らかな気持ちに加えて、物腰も立派であるための分別を十分に備えている。その場合、貴婦人が分別をもっとたくさん備えているなら、しつけと教えも心得るがよい。しかし彼女は分別をどれほど備えていようと、それをひけらかしてはならぬ。彼女は町一番の政治的権力者として、求められてはいないのだから。一人前の男は、多くの知識を得るべきである。高貴な婦人のしつけは、立派な高貴な婦人があまり賢さを持たないことを望む。単純であることは、貴婦人達に似つかわしい。》

貴族の娘たちは、社会的身分や家長の教育目標に応じて、但し男によって制約をうけた教育の範囲内で、ラテン語ばかりかフランス語も習い、舞踏や楽器の演奏、作詩作曲および歌唱の技術も習得し、更にチェスや鷹狩りにまで、学習範囲を拡大する場合もあった。これらの教育は、ほとんど

が家長の命令によってなされる。騎士達に宮廷的な大きな喜びを与え、彼らを自己陶冶させ、理想に向かって邁進するよう鼓舞激励できる女性は、美しく華やかであるのは勿論のこと、慎み深い物腰と、音楽の技術、および騎士達と知的な会話が楽しめるだけの広い教養を、是非とも身につけていなければならなかったからである。ゴットフリートの『トリスタンとイゾルデ』は、そのような事実を詳しく報告してくれる。

si kunde ê schoene vuoge
und höfscheit genuoge
mit handen und mit munde.
diu schoene si kunde
ir sprâche dâ von Develîn,
si kunde franzois und latin,
videlen wol ze prise
in welhischer wise.
ir vingere die kunden,
swenne si's begunden,
die lîren wol gerüeren
und ûf der harpfen vüeren
die doene mit gewalte.
sie steigete unde valte
die noten behendeclîche.
ouch sanc diu saeldenrîche
suoze unde wol von munde.
und swaz s'ê vuoge kunde,
dâ kam si dô ze vrumen an.

ir meister der spilman

der bezzerte si sêre.

⋮

Sus haete sich diu schoene Îsôt

von Tristandes lêre

gebezzert sêre.

sî was suoze gemuot,

ir site und ir gebaerde guot.

si kunde schoeniu hantspil,

schoener behendekeite vil:

brieve und schanzûne tihten,

ir getihte schône slihten,

si kunde schriben unde lesen.²⁰⁾

《彼女はそれ以前に、手と口で演ずる立派な技能と、宮廷風礼儀作法を十分に身につけた。この美しき乙女は、当地のダブリンの言葉だけでなく、フランス語やラテン語にも通じており、とても見事にウェールズ風の調べで、提琴を弾くこともできた。彼女の指は一度弾き始めると、ライエルを上手につま弾き、豎琴では調べを力強くかなでることができて、巧みに音階を上げたり下げたりした。またこの天賦の才に恵まれた乙女は、愛らしい口で素晴らしく甘美に歌った。彼女が以前に習得した技能が、そのとき彼女の役に立ったし、彼女の師をつとめる楽人が、彼女の芸をいっそう進歩させたからだ。……こうして美しいイゾルデは、トリスタンによる教えのお陰でますます進歩した。心ばえは魅力的で、その礼儀作法や立ち居振る舞いは立派であった。彼女は見事な弦楽器の演奏法と、すばらしい技能の数々をマスターして

いた。つまり作詩作曲をし、自作の詩を美しくまとめあげることができたし、書いたり読んだりすることもできた。》

ゴットフリートのこの引用の中でも触れられている宮廷的礼儀作法は、若い女性に対する教育目標の中で、最も重要なもののうちの一つである。この礼儀作法を娘達に習得させるために、どのような注意を払わなければならないか。そのことを詳細に説明した詩人は、絶えず貴族に道徳的自覚を与えようと努めるトマズインである。先の引用の中で詩人は、女性の外面的美だけに目を向けるのではなく、むしろ女性の内面にある美德と知恵にこそ、目を注ぐべきであることを説いた。その道徳的哲学を更にすすめて、娘達の礼儀作法について次のように教える。

Ein vrouwe ſol ſich ſehen lân,
 kumt zir ein vrömeder man.
 swelihu ſich niht ſehen lât,
 diu ſol ûz ir kemenât
 ſîn allenthalben unerkant;
 bûeze alſô, ſi ungenant.
 ein vrouwe ſol niht vrevelich
 ſchimphen, daz ſtât vröuwelich.
 ⋮
 ein vrouwe ſol niht vaſt an ſehen
 einn vrömeden man, daz ſtât wol.
 ⋮
 Ein juncvrouwe ſol ſenftliclich
 und niht lût ſprechen ſicherlich.

⋮

zuht wert den vrouwen alln gemein
f̄itzen mit bein über bein.

⋮

ein vrouwe fol ze deheiner zît
treten weder vaft noch wît.

⋮

ein vrouwe fol f̄ich, daz geloubet,
kêren gegen des pherftes houbet,
f̄wenn f̄i rîtet; man fol wizzen,
f̄i fol niht gar dwerhes f̄itzen.

⋮

ein vrouwe erf̄chraht hât dicke getân
den f̄prunc der bezzer wær verlân.

⋮

ein vrowe fol recken niht ir hant,
f̄wenn f̄i rît, vûr ir gewant;
f̄i fol ougen und ir houbet
f̄tille haben, daz geloubet.²¹⁾

《客が婦人のいる所へ参上したら、彼女は姿を見せるべきである。姿を見せない婦人は、婦人部屋の外ではどこでも、知られぬ人でいなければならぬ。つまり貴婦人としてその名が挙げられないままにいるという、大きな償いをしなければならぬ。婦人は、あつかましいほどふざけるべきではない。そうしないのが婦人には似つかわしい。……婦人は、客をしげしげと見つめるべきではない。そうしないのが彼女

には似合うのだ。……まことに若き婦人は、穏やかに話すべきであつて、声高にしゃべるべきではない。……礼儀作法は、ご婦人がた皆に同じように、足を組んで座ることを禁じている。……婦人はいつでも、ドシドシと歩いたり、大股で歩いたりすべきではない。……婦人は馬に乗るとき、馬の頭の方に体を向けて乗るべきで、決して横向きに乘ってはならない。……婦人は驚いて跳び上がることがよくあるが、そのようなことはしない方がよい。……婦人は馬に乗るとき、手を衣服の前の方に出すべきではない。また目や頭を落ち着きなさそうに動かしてはならぬ。》

このあと詩人は更に、衣服の着方やしゃべり方に至るまで、婦人が身につけるべき作法を拡大する。

Wil ſich ein vrowe mit zuht bewarn,
 ſi ſol niht âne hülle warn.
 ſi ſol ir hül ze ſamen hân,
 iſt ſi der garnatſch ân.
 lât ſi am lîbe iht ſehen par,
 daz iſt wider zuht gar.
 ⋮
 ſi ſol gên vür ſich geriht
 und ſol vil umbe ſehen niht;
 ⋮
 ein juncvrouwe ſol ſelten iht
 ſprechen, ob mans vrâget niht.
 ein vrowe ſol ouch niht ſprechen vil,

ob fi mir gelouben wil,
 und benamen fwenn fi izzet,
 fô fol fi fprâchen niht, daz wizzet.²²⁾

《婦人は、礼儀作法によってわが身を守ろうとするのなら、マントを着ないで外出してはならない。上着を身につけていない場合には、マントの前がはだけないように、ピッタリと閉じ合わせておかなければならぬ。体のどの部分でも露わなところを人目にさらすなら、それは全く礼儀作法に反することだ。……婦人はまっすぐ前方に向かって歩くべきであって、あたりをキョロキョロ見回してはならぬ。……ものを尋ねられていないときは、滅多にしゃべってはならぬ。婦人は、私の言うことを信じようとするのなら、あまりべちゃくちゃしゃべってはならぬ。特に食事をしている最中は、人と話すべきではない。》

トマズインはこのようにこと細かに、女性が身につけるべき作法を説いていく。その根底にあるのは、先に検討した旧約聖書以来の「女性は男性に従うように創られた」という思想である。古代から中世を経て現代に至るまでいっこうに変わることのない、驚くべき思想である。そこでは女性は常に、受動的な行動をとるべきことが要求される。だからこそ、恥じらいと純潔が、女性の最も重要な徳操とされた。これらの徳操は女性に属するものであって、男性の徳操と重なるものではない。トマズインは、女性の徳操と男性の徳操を対立させて、両者の差を次のように説明する。

ein vrouwe fîch behüeten fol
 vor valfche harter dan ein man;
 valfch ftât den vrouwen wirfer an.

fô ftât milte allen liuten wol:
 ein ieglich vrowe milt wesen fol;
 doch zimt diu milt den rîtern baz
 denne den vrouwen, wizzet daz.
 diemüete zimt in beiden wol:
 ein rîter und ein vrouwe fol
 diemüete fîn; doch ftêt diemüete
 den vrouwen baz, wan ir güete
 fol fîn geziert mit der tugent
 beidiu an alter und an jugent.
 dem rîter zimt wol vrümkeit,
 den vrouwen triuwe und wârheit.
 der rîter zage ift enwiht:
 daz valſche wîp ift ouch ze niht.
 der rîter arc ift gar ân êre;
 daz tumbe wîp an güete lære.
 dem rîter zimt niht ſchalkeit:
 ein vrowe fol vor unſtætekeit
 und vor untriuwen fîn behuot
 und vor höhvert, daz ift guot.
 fînt diſe tugende an ir niht,
 fô ift ir ſchœne gar enwiht.²³⁾

《御婦人は不実に対して、殿方よりも厳しく身を守るべきである。不
 実というものは、殿方よりも、婦人達にこそふさわしくない。それ
 に対して気前よさは、すべての人々に似つかわしい。どの御婦人も、

気前よくなければならぬ。だが気前よさは、婦人達によりも、騎士達にこそ似つかわしい。そのことを心得ておきなさい。謙虚は、婦人にも騎士にもよく似合う。騎士も婦人も謙虚であるべきだ。しかし謙虚は、婦人達にこそいっそうふさわしい。というのは、婦人の美質は、老年でも若年でも、謙虚という徳操で飾られるべきだから。騎士には勇敢さが似つかわしく、婦人には忠実と誠実がふさわしい。臆病な騎士は何の役にも立たぬ。不実な婦人も役に立たぬ。けちな騎士は全く尊敬されない。未熟な女性は立派さに欠ける。騎士に卑しい心は似合わない。婦人は、心変わりや不誠実や思いあがりから、しっかり守られるべきである。そうすることは良いことだ。これらの徳操が婦人に備わっていなければ、彼女の肉体的な美しさは、何の価値もない。》

6. 女性を軽蔑し敵視する伝統は、言うまでもなく旧約聖書以来のキリスト教が培ってきた。創世記で述べられる墮罪をはじめとして、どのような悪も女性の悪に比べれば無に等しいとか、神に対する罪の根源は女性にあると述べて、女性をひどく貶めた。自分では抑制できず、男性の助けなしでは生きられないゆえ、常に男性に従うべきだとも主張して、女性をどこまでも見下してきた。まるで教理として確立されたが如きこの思想に基づいて、従って女性に対する恐怖心を男性が内に抱いたまま、女性蔑視は現代まで絶えることなく続いている。しかし歴史の途中で、すなわちヨーロッパ中世の11世紀に、この思想はフランスの宮廷文芸において大きな動揺を経験する。世紀末にはドイツでも、同様の経験をするようになった。それまでは常に優位に立とうとしていた男性が、にわかには貴婦人の足もとに跪き、真心かけて愛を誓うようになった。伝統的な男性優位を反転させたこの新しい男女の関係の元型については、マリア崇拜や封建制度の主従関係など、いくつもの推理がなされている。しかしその元型がいずれであ

ろうと、その底にある要因の一つは、過度の女性敵視に対する反動であろう。シュタウフェン王朝のかなり安定した政治状況、そして農業生産の増大や都市の誕生等の社会状況が、それを後押ししたものである。それにもかかわらず、文芸の上でも十分に女性を解放できない男性の根源的弱さは、はしなくも女性に対する教育に現われた。理想的女性像とは、女性に幸せを約束するものではなくて、男性に従順な、男性に都合のよい女性を作ることを目指したものである。ドイツ中世の12, 13世紀は、一方では貴婦人を崇めながら、他方では娘たちを男性の支配下に置くよう教育するという、男性の自己矛盾をさらけ出した時代であった。ドイツ中世の多様なジャンルの作品からの引用によって、そのことが明らかにされた。

〔注〕

- 1) Cl. Frhr. von Schwerin (hrsg.) : Sachsenspiegel (Landrecht), Reclam Nr. 3355, Stuttgart, 1987. S. 34 (I, 24, 3)
- 2) Heinrich Rückert (hrsg.) : Der Wälsche Gast des Thomasin von Zirclaria, Berlin, 1965, S. 36 (V. 1304-1327)
- 3) Hugo Moser / Helmut Tervooren (hrsg.) : Des Minnesangs Frühling, I. Text, Stuttgart, 1982, S. 25f. (8, 1-8; 10, 17-24)
- 4) Joachim Bumke: Höfische Kultur, Literatur und Gesellschaft im hohen Mittelalter, 2 Bde., München, 1986 ; Otto Borst: Alltagsleben im Mittelalter, Frankfurt a.M., 1983. ; Helmut de Boor (hrsg.) : Die höfische Literatur. Vorbereitung, Blüte, Ausklang (1170-1250) in ‚Geschichte der deutschen Literatur‘ begründet von Helmut de Boor und Richard Newald, Band II. München, 1979.
これらの著書から多くの示唆を得た。
- 5) Ebd. Des Minnesangs Frühling, S. 43 (Friedrich von Hausen 47, 33-48, 2)
- 6) Karl Lachmann / Wolfgang Spiewok (hrsg.) : Wolfram von Eschenbach: Parzival, Reclam Nr. 3681, Stuttgart, 1981 (116, 5-12)
- 7) Friedrich Ranke / Rüdiger Krohn (hrsg.) : Gottfried von Straßburg: Tristan, Reclam Nr. 4472, Stuttgart, 1980, S. 478ff. (V. 17925-17975)
- 8) Ebd. Parzival, S. 258ff. (151, 21-30)

- 9) Helmut de Boor (hrsg.) : Das Nibelungenlied (Deutsche Klassiker des Mittelalters), Wiesbaden, 1972, S. 150 (894, 1-4)
- 10) Ernst A. Ebbinghaus (hrsg.) : Das buoch von dem übeln wibe, Altdeutsche Textbibliothek Nr. 46, Tübingen, 1968, S. 30ff. (V. 742-820)
- 11) Ebd. Das Nibelungenlied, S. 115 (673, 1-4)
- 12) Thomas Cramer (hrsg.) : Hartmann von Aue: Iwein, Berlin, 1981, S. 149f. (V. 7671-7687)
- 13) Friedrich Ranke / Rüdiger Krohn (hrsg.) : Gottfried von Straßburg: Tristan, Reclam Nr. 4471, Stuttgart, 1981, S. 482ff. (V. 8036-8079)
- 14) Ebd. Der Wälsche Gast, S. 26f. (V. 947-956)
- 15) Ebd. Des Minnesangs Frühling, S. 216 (Heinrich von Rugge 107, 27-30)
- 16) Gustav Roethe (hrsg.) : Die Gedichte Reinmars von Zweter, Leipzig, 1967, S. 435 (Nr. 48)
- 17) Karl Lachmann / Wolfgang Spiewok (hrsg.) : Wolfram von Eschenbach: Parzival, Reclam Nr. 3682, Stuttgart, 1981, S. 14 (437, 29-438, 5)
- 18) Ebd. Parzival (Nr. 3682), S. 362ff. (644, 21-26)
- 19) Ebd. Der Wälsche Gast, S. 23f. (V. 837-849)
- 20) Ebd. Tristan (Nr. 4471), S. 480ff. (V. 7981-8141)
- 21) Ebd. Der Wälsche Gast, S. 11ff. (V. 391-440)
- 22) Ebd. Der Wälsche Gast, S. 13 (V. 451-470)
- 23) Ebd. Der Wälsche Gast, S. 27f. (V. 970-994)